明治期の〈黄禍論〉言説に見た森鷗外
── 講演「人種哲学梗概」と「黄禍論梗概」を中心に ──

廖　育卿

はじめに

森鷗外は明治時代に、文学者、外国文学の紹介者、教育家のほか、文芸界の各ジャンルにおいて数々の功績をあげている。様々な顔を持つ鷗外であるが、文学者としては小説の創作だけにとどまらず、外国文学・戯曲の翻訳、美学に関する文学理論を紹介するなど、彼の多面性を文壇と社会に示した。またその他にも、軍医として従軍した鷗外は、衛生学に関する論文や戦争論を発表した。直接戦場に立つ機会は殆どなくとも、明治の官僚系統を通し、当時の国家観と国際関係について、渡欧経験のある鷗外は相当の理解を持っていたはずである。そのため、異文化と接する際にどのような姿勢で臨むべきかについて独自の見解を持つ鷗外は、越境者としての側面も認識されるであろう。

異文化を経験した鷗外を論じるにあたり、彼の異国に接した経験を無論看過することはできまい。その中でも、よく言及されるのは、彼のドイツ留学（明治十七（1884）―二十一（1888）年）経験である。この四年間は鷗外にとって、ヨーロッパ世界への入り口であり、この期間に積み重ねた西欧の異文化理解が、帰国後の創作意欲の源になったことは疑う余地もないであろう。ここで留意すべきことは、彼の異人種について示した立場であり、これもまた興味深い問題である。鷗外の異人種に対する見方は、「ドイツ三部作」における人物描写と「独逸日記」における言及から容易に窺えるが、公の場で最初に見解を示したのは、明治二十三（1890）年九月の「報知記者の人種相忌の説」（『国民之友』、原題「皮相（寄稿）」）である。ある記者の〈欧人種の我邦人種を侮りて、条約改正の業など、阻格するならず〉という記事が〈異種相忌〉として報知新聞に載せられた。この〈異種相忌〉説に対し、鷗外はそれがあまりにも皮相的な考えだと指摘し、政治あるいは歴史から他の原因を求める必要があると述べた。

そして、鷗外が公の場で〈人種〉問題を扱ったのは、講演の内容に基づいた「人種哲学梗概」と「黄禍論梗概」である。「人種哲学梗概」は、鷗外が明治三十六（1903）年六月六日に国語漢文学会において演説した内容に拠ったものである。その内容はジョセッフ・アルチュウル・コント・ド・ゴビノオ（仏）（JOSEPH ARTHUR COMTE DE GOBINEAU、1816 - 1882）の人種哲学の紹介とその批判である。もう一つの鷗外の講演「黄禍論梗概」は、あたかも日露戦争の直前、明治三十六（1904）年十一月二十八日に早稲田大学の課外講義で行われたものである。この講演でも、前述した「人種哲学梗概」の形式と同様に、サムソン・ヒンメルスチュェルナ（独）（SAMSOM - HIMMELSTJERNA）という人物の *Die gelbe Gefahr als Moralproblem* という著作の要約をし、系統的に紹介した。

この〈人種〉問題に関する二回の講演内容は、それぞれに単行本として春陽堂から刊行された（明治三十六（1903）年十月二十一日、春陽堂）と（明治三十七（1904）年五月三日、春陽堂）。鷗外の〈人種論〉と〈黄禍論〉の発表は、日露戦争（明治三十七（1904）- 三十八（1905））が勃発する直前にあたる敏感な時期だったの

である。そして、講演の対象が「国語漢文学会」と「早稲田大学課外講義」に出席する知識人であったため、論の中心は〈日露の間には恐らくは戦争を避けられぬ〉状態になる原因を解明することにあった。それに基づいた誤謬を正そうとする鷗外の意図は十分に明らかであろう。しかし、この二篇の〈人種〉問題をめぐる講演は、当時の文学界においても鷗外文学においても大きな反響は引き起こさなかったようである。日露戦争勃発の直前に当たって、〈人種論〉と〈黄禍論〉についての議論が政治界や社会などで白熱していたため、鷗外の発言は本来注目されるはずであったが、なぜ反響を呼ばなかったのであろうか。

これは、無論知識層が〈人種〉問題と〈黄禍〉言説をどの程度認識していたかに関わっているが、当時これらの言説がどの程度日本社会に受け入れられていたかにもよるものであろう。それ以外にも、次の二つの可能性が考えられる。まず、日露戦争前に既に〈人種論〉と〈黄禍論〉に関わる様々な言論が生み出される風潮が瀰漫していたため、鷗外の講演は目新しいものではなく、あまり注意を引かなかった可能性が高いということである。例えば、国家主義を主張していた高山樗牛は、この時期の代表的知識人の一人である。樗牛全集を概観すれば、第二期（明治三十－三十三年）にあたる著作『世界文明史』（明治三十一年一月）に、「人種競争として見たる極東問題」（明治三十一年一月）や「十九世紀総論」（明治三十三年六月）などのような〈人種競争〉の問題をしきりに取り上げていることがわかる（注1）。また、無視できないのは、「人種論梗概」で言及された田口卯吉という人物である。田口の日本人種の考察に基づいた『破黄禍論』は、その当時かなり際立った存在であった。

もう一つの可能性としては、鷗外自身が強く批判する姿勢がこれらの演説にあらわれていなかったため、その後世間から軽視されてしまったということも考えられる。確かに、「人種哲学梗概」においては、鷗外はただ淡々とゴビノオ氏の人種哲学の空想性と粗雑さを批判しただけなのである。「黄禍論梗概」でも、サムソン・ヒンメルスチュェルナ氏の論点を紹介するに留まり、鋭い目で批判する彼らしいスタイルが見られないのである。なお、前者がゴビノオという思想家の紹介であったのに対し、後者はあまり名の知られていない研究者の著作が対象だったからかもしれないが、二つの講演に鋭い批判がほぼ見られず、皮肉な口調で演説を終えたことは共通している。この〈人種〉、〈黄禍〉というテーマを扱ううえで、鷗外は決してそれらに無関心であったわけではないが、なんらかの理由で彼はこの主題についての直接的な批判を回避していたようである。では、なぜ鷗外は〈人種論〉と〈黄禍論〉についての批判を回避していたのであろうか。

十九世紀末頃より黄色人種の国家、特に中国と日本の勃興の脅威が〈黄禍論〉として声高に唱えられてきた同時代の他の言説と比較すれば、冷静に傍観している鷗外のこのような立場は興味深いものである。そこで本研究では、これまで鷗外文学ではそれほど重要視されてこなかった「人種哲学梗概」と「黄禍論梗概」を取り上げ、〈人種論〉と〈黄禍論〉流布の社会背景、日本国内の言説及び鷗外の演説の意図に注目する。また、同時代の言説である高山樗牛や田口卯吉の立場と比較し、鷗外の〈黄禍論〉の立場を明らかにする。そして、この二つの講演の意図を解明するために、彼の実生活の記録である日記も参照する。本研究を通し、日露戦争の勃発直前の〈人種論〉と〈黄禍論〉の二つの言説をめぐる議論の視点から、鷗外文学における「人種哲学梗概」と「黄禍論梗概」の位置づけの再評価が期待できる。

― 〈黄禍論〉の定義とその背景

いわゆる〈黄禍〉(YELLOW PERIL・GELBE GEFAHR) は、黄色人種の勃興を恐れ、恐怖・嫌悪・不信・蔑視などの感情を抱いた白色人種の偏見に基づく論である。〈黄禍〉に関する論説・著作は独・英・米などの国ではいくつか挙げられるが、いずれも東洋諸民族、とりわけ中国の台頭がやがてはヨーロッパ諸国を脅かす可能性があると警告しているのである[注2]。例えば、アメリカでは後に数多く出回ることになるが、中国による侵略を描いた小説の第一号が早くも一八八〇年に現れる。そして、〈黄禍〉という言葉が世界に知れ渡るのは、それから間もなくのことである。このように、〈黄禍論〉は十九世紀後半から擁護され始め、二十世紀の初頭西洋世界で急速に広まった。ところが、明治二十八 (1895) 年、日本が日清戦争に勝利したという事実は、清国の軍事力が弱体だと世界に暴露し、列強に対抗する力が実はアジアの大国には存在しないことを知らしめてしまった。一方、日本はアジアでの真の新興勢力としての地位を確立していたため、それ以降、〈黄禍〉の矛先が日本に向けられることになったのである。日清戦争中日本は大きな損害も受けたが、清国から厖大な賠償金を得たため、日清戦争後は〈戦後経営〉に積極的に着手することができた。国家財政の改善などの経済面でも、主権者としての天皇制を中軸にした立憲国家という構造、いわゆる帝国憲法体制へ発展する政治面でも、明治政府は近代国家へと変身しようとする野望を隠せなかったのである。同時に、松方正義蔵相が「財政意見書」を提出し、日清戦争後〈我国軍備の拡張は実に一日も緩にすべからず〉と軍備拡張を必然のものと認め、明治政府は軍事力を増強していった。この軍備拡張も後日〈黄禍論〉言説の流布と日露戦争の遠因となった。日清戦争以来、日本は有色人種唯一の列強となり、東アジア (特に中国) をめぐるロシア／ヨーロッパ列強との利益上の摩擦が絶えることはなかった。このように、隣国のロシアだけでなく、ヨーロッパ諸国にとって、東アジアの小国にすぎない日本が利益分割上莫大な脅威になったため、日本を対象とする〈黄禍論〉はますます白熱したのである。このような政治的利益に基づいた〈黄禍論〉で人々は扇動され、ついには日露戦争の勃発が不可避な状態にまで追いやられたのである。

このように、人種間的優越感に基づいた〈黄禍論〉と〈人種論〉は、互いに切り離されない関係にある。しかし、ヨーロッパにおいて、〈黄禍〉という言葉が用いられ始めた時期は不明であるし、〈人種論〉言説がいつ日本に入ってきたか、〈黄禍論〉の言説がいつ頃始まったかについても、明確な記載がない。しかし、最初に日本国内でこのような言説を受け止めたのは、政界であろう。政界の〈黄禍〉論認識は、明治三十四 (1903) 年の閣議で〈恐黄熱〉という言葉に初めて言及したものによる[注3]。この閣議に用いた〈恐黄熱〉は、人種間の対立から芽生えたものが政治的な思惑と絡み合い、本格的に〈黄禍論〉という言葉が定着するようになったと考えられる。それ以降、〈人種論〉、それに基づいた〈黄禍論〉についての論議は、ヨーロッパにおける黄禍論が高揚するにつれて深まっていった。ヨーロッパにおける黄禍論の高揚が、日本の日清戦争勝利を契機として始まったことは前述の通りであるが、日本では、三国干渉による遼東半島の返還などに伴う相対的な国力の衰退を懸念し、そこから西欧列国に対する劣等感が深まっていったのである。このような背景があったため、これを民族的ないし人種的屈辱として受けとる傾向も強まったのである。このように、白色人種を中心とした列強と肩を並べることができるという自尊心と、黄色人種であるという西欧諸国に対する劣等感の相反する感情を同時に持ちながら、日本は帝国主義国家の道を歩んでいった。

二 鷗外の「人種哲学梗概」と「黄禍論梗概」

黄禍論〉言説が流布する背景に前節で触れたように、欧州列強は日本の武力が強まっていくことを恐れ、〈黄禍〉の対象を日本まで包括するようになった。その点を踏まえ、本節では鷗外の「人種哲学梗概」と「黄禍論梗概」の内容を確認する。

「人種哲学梗概」は、森鷗外がジョセッフ・アルチュウル・コント・ド・ゴビノオ（仏）(JOSEPH ARTHUR COMTE DE GOBINEAU、1816・1882）の人種哲学を中心に紹介したものである。ゴビノオの著作では、まず世界の歴史上の〈開化〉の例として、旧世界の開化、つまり印度・埃及・アシリヤ（ASSYRIA）・希臘・支那・羅馬・日耳曼、及び新世界の開化、つまりアレガン（ALLEGHAN）・アステック（AZTEK）・ペルウ（PERU）を挙げる。これらの開化をもたらしたのは、印度古代の人種の血統、つまりアアルヤ（ÀRIA）人種としているのである。その〈開化〉の意味と定義に先立ち、全ての人種が二つの本能、つまり生活に利益のあるものを求める〈物質的本能〉（物的本能）と思想の面で安心立命を求める〈精神的本能〉（心的本能）を有することについて述べた。この二つの本能は、〈開化〉の土台になるものであり、両方が揃って発達しない限り、いつまでも開化できないのである。

ところが、その〈開化〉は一度成就されても、やがて破壊されるという興亡が歴史上相次いでいる。開化破壊の原因としては、ファナチスム（FANATISME）すなわち宗教上の熱衷、奢侈、風俗の頽敗、イルエリジオジテェ（IRRELIGIOSITE）すなわち不信仰、政治の退歩などがあると、希臘羅馬時代の学者の説を挙げる。ゴビノオは歴史的事例に基づいて証拠づけをし、開化の破壊が国民のデジェネラション（DEGENERATION）すなわち〈退化〉によるとしていると指摘した。またその〈退化〉とは、異人種間の混血の結果によるもので、種族の衰微をもたらしたと主張している。種族には、開化する民（能化の民）と開化される民（所化の民）を分けている。両者の血には明らかに優劣があるので、混血せず純血が守られれば開化の破壊はないと言う。

そしてゴビノオは歴史的事例から列挙し、能化の力は政治にあらず、政治が能化の力を持つ本能（血）に基づいているか否かによって、その国の興亡は決定するとしている。なぜなら、政治というものは人種の本能から出て来るべきものであるため、人種の優劣を左右することができないのである。次に、自然環境も開化には関係ないとし、また宗教も、開化を助けることはあっても、開化の原因にはならないと述べている。要するに人種の開化は、政治や自然や宗教など《血統と本能とより外のものに起因していない》と言うのである。

人種の由来である血統の分類に関する論究としては、人類一源論と人類多源論と（MONOGENISMUS S. MONOPHYLETISMUS ; POLYGENISMUSS.POLYPHYLETISMUS）がある。人類一源論には旧約聖書のアダムをはじめとする旧来の説に対し、一つの種（SPICIES）から生じた変種が各人種であるとする新しい説がある。ゴビノオは旧来の説を否定する理由はないとして一源論に立っている。そして歴史以前における人種の分裂の状況についてはすでにジョルジュ・プュギエエ（GEORGE POUCHET）の説がある。彼の説によれば、人類の最初の居所とする三つの山脈に、三つの人種が出たという。それは、コーカサス（KAUKASOS）からは白人が、アルタイ（ALTAI）からは黄色人が、アフリカの西北のアトラス（ATLAS）からは黒人が出たと言うのである。しかし、ゴビノオの説はこれと違っている。彼の持論は人類の祖先は平地におり、そして漂流などによって拡散したとしている。また、原初の唯一の人類を第一定型とするならば、それから分かれた第二定型が白色・黒色・黄色の三種であり、さらに細目を立てるなら、白人にはセム（SEM）族とヤフェット（JAPHET）族があり、黒人はハム（HAM）族、黄人は蒙古人種と

フィンランド（FINNLAND）人種とタタアル（答々爾）人種とに分けられるとしている。その上に血が混ってできたのは第三定型となり、黒人と黄人の間に残っている。さらに血が混ったら第四定型となる。

さて、ゴビノオは現在の三人種の開化についてまず、黒人は獣に近いところがあり、体力は中等であるが体形上に美がないと述べている。嗅覚・味覚は発達しているが、食を選ぶ所がない。感情は極端ながら永続せず、意志は猛烈であるが智力は平凡である。それゆえ、生命を尊重せず無意識裡残虐を行うような人種であり、開化する力も開化せられる力もないとしている。次に黄色人種について、頭脳は黒人に勝るが体力は弱いとしている。感官は時に応じて機能し、黒人のように貪り食うようなことはない。感情の起伏も黒人ほどでなく、意志は弱いが、逸楽を求める。理解力は普通程度であるが、利益を重んずるがゆえに欲は深く、生命や自由を少しは重んじる、というように、概して万事が中等であるとする。他の人種を開化する力はないが、開化せられるだけの能力はあるとして、先述した黒人と同様〈若し他種と血が混っても、時としては利益がある〉下等の種族と見なしているのである。そして最後に、白人については次のように言う。人類の正当な体を備えており、体力は強いが、それを節倹して使う。美はこの人種のみが専有する特質である。視覚や嗅覚は黒人や黄色人より劣り、感情も弱いが、意志が強く、抵抗に遭遇しても智力で切り抜ける。利益を重んじるが、それは高尚な利益である。生命を大いに重んじる反面で、意識的な残虐も行う。自由を大いに尊び、黒人や黄色人の知らぬ栄誉を得んがために生命すら顧みないこともある。他の人種を開化する力も他の人種に開化せられる力も持つ唯一の能化の民であるから、他の人種と混血することは損にはなっても得することはない。そして歴史上の英雄たちのような純血の人が、今はもう存在していない、と強調している。これに反して、劣等人種は混血による利益が大きい。また彼は、開化が上流に偏し、下流にまで貫徹しないという状況は、ゴビノオの自国仏蘭西に限らず、欧羅巴中に広がっているため、やがては開化にあずからない多数の下流によって開化は破壊される可能性があるだろうと警告を発しているのである。

以上は、鷗外によって紹介されたゴビノオの人種論の概要である。鷗外はこれに対して適切な批評を加えるには準備が不十分だと述べながら、次のように論述した。ゴビノオの見解は、純血を慕い、混血を斥ける白人のための我田引水の論でしかなく、それが偏見に基づいていることは余りにも明らかである。彼の論説が今日のドイツで評判を得ているのは、論の粗大さが一見偉大そうに見えることや、西洋の開化の破壊を予言していることや、破壊後も開化のためにはアアルヤ（ÂRIA）人種の純血によらねばならないとしていることなどにあるのではないかと推察した。それはむしろ、実情としては、開化力を有する唯一の人種であるという自負心が揺らぎ始めた裏返しではないかと、鷗外は皮肉な結語を残し講演を終えた。

もう一つの鷗外の講演「黄禍論梗概」では、ヒンメルスチュエルナの所説を次のように紹介している。黄禍は、商業と工業の競争において黄色人が白人の妨害になるという〈平和的黄禍〉と、黄色人との戦争で白人は困難に遭難するだろうという〈戦争的黄禍〉との二つに分けられている。その根底には、人種間の憎悪（RASSENHASS）があるからである。黄色人が白人を憎む感情は日本も支那も変わりがないが、支那人はそれを公然と表に出し、日本人は横着な政略（VERSCHLAGENE POLITIK）で隠す傾向があるとしている。白人への憎悪の情は、白人による十六世紀以来の基督教の布教という歴史的背景があるとしている。

そして、商業と工業の競争も黄禍の原因となっている。元来、欧羅巴諸国の政府が基督教を宣布することを幇助してきたのは布教そのもののためでなく、主な目的はそれを利用した輸出区域の拡張にある。この競争は黄禍の原因でもあれば、黄禍そのものの一面でもある。また、このような、日本が白人種に加えるにいたった圧迫が、やがては広大な支那によってなされるようになれば、その圧力たるや想像を絶するものになろうという臆測の元、日本と支那との比較をいくつかの観点から試みている。よって、以下その点を詳しく見ていくことにする。比較に際してこの論者が参考にしたのは墺太利の政治家アレクサンデル・フォン・ヒュブネル（ALEXANDER VON HUEBNER）の『世界周遊記』であった。同書では、日本人を軽侮しながらも〈子供〉のような愛すべき面を含ませていたが、日清戦争後に出されたこの黄禍論においては、〈支那は老成、日本は弱輩〉と解している。

さて、精神上の能力面で日本人と支那人を比較するところによれば、日本人は思考力・抽象的能力がないため、道理を考えることができず、あたかも催眠術にかかったように、わけもなく物真似に走る。一方、支那人は沈着で外来のものを妄りに寄せつけるようなことがなく、終始自分の工夫で進歩しているというのである。次に道徳面の比較では、日本には特有の道徳がないので何を理想とするのかがはっきりしないが、直接に見聞したもの以外を認めないようであるから、日本人は唯物家であるとされている。それに対し、支那人は古の道を尊び、祖先を崇拝し、品行よく、治国天下の基となる家のための婚姻を重んじ、日本のように妻を虐遇することはないとしている。これに続けて以下は、宗教面での比較、軍事的風気における比較、政治面での比較、教育面での比較、農業および商工業の面からの比較、開化の全体にわたっての比較などを述べているのであるが、その筆致はいずれの面に関しても、ことさらに日本を貶しめる一方で、いかに支那が欧羅巴にとって脅威の国になるかということを力説するために費やされている観がある。

以上のように日本と支那と比較した上で、論をまとめれば、次のようになる。来世を頼みにし、前世の罪業を負って生きる彼岸教徒（JENSEITER）たる西洋人が、労働を責務とする現世の教えを奉ずる此岸教徒（DIESSEITER）たる支那人と、商工業の競争で対決するようになった場合、つまり〈平和的黄禍〉を想定した場合、今でさえ日本の進出に危機感を抱いているのであるから、その大いなるもの（COLOSS）によって圧倒されることはほぼ決定的であろうと危惧せずにはいられない。それだけでなく、〈戦争的黄禍〉にも触れ、遠からぬ将来において、支那は国力を増強し、事によると日本と協同して欧羅巴を攻撃し、全東亜細亜から欧羅巴放逐の挙に出るであろうと予見し、先に日本に対して行った三国干渉などはいわば〈防黄禍策〉の一環としての先制攻撃に他ならなかったとしている。

そこで提起されるのは、欧羅巴人が今までに犯してきた数々の失策を反省することである。それは、基督教徒が猶太教徒を殺したように、黄色人に対して残虐を重ねてきたことや、欧羅巴が続けてきた支那に対する吸取政策や、政治力を背景にした強迫がましい宣教師の活動である。さらに、そうした反省の上に立って今後の欧羅巴が努めねばならない課題を掲げている。それは、支那に倣って治水に励み農業を盛んにすることや、支那のように生活の需要を減ぜしめるために労働社会の道義心を高めることや、古来から支那において一貫してきた天下一統と固有の無宗教道徳に学んだ国民の道徳改良に向かうことなどである。

以上が、鷗外によって紹介されたサムソン・ヒンメルスチェルナの黄禍論の大要である。これについても鷗外は短評を付している。まず、商工業の面で欧羅巴が競争力を失いつつあるのは道徳上の問題が原因になっているとしているが、もしそうであるならば、それは自業自得であるという。次に、

戦争的方面についても、欧羅巴が支那に作った利益圏や租借地から遠からず追放されることになるのではと危惧しているが、これも罪はわが身にあるのであり、黄色人に反撃されるのはむしろ正理に基づくことと悟るべきだと断じている。さらに、日本人と支那人との比較において、支那人についてはことさらに理想化しながら、日本人に対してはあえて穴探しをせずにおれないのは、当面の敵である日本への憎しみが強いからに他ならないと見ている。そしてこれを画にするなら、《西洋人は日本人と角力を取りながら、大きな支那人の影法師を横目に睨んで恐れて居るのでござります。日本人を恐れて黄禍論を唱へ出しながら、なあに、日本人がこはいものかと云って居るのでござります。支那人はこはいものになるだらうといふのは、差当たり影法師に過ぎませぬ。所詮黄禍論といふものは一の臆病論だといふことは、大略御了解になりましたらうと存じます》と述べ、巧みな比喩で諷刺を響かせながら黄禍論紹介の講演を閉じているのである。

以上に示した二つの講演から、鷗外の人種・黄禍に対する立場がわかる。まず、それまでの人種の分類についての言説に対し、鷗外は大きな疑問を抱いていたと推測できる。特に純血の民族が〈開化〉をもたらすという論述に対し、かなり大きな反撥が見られる。また、日本民族の源がアアルヤ(ÁRIA)とする田口卯吉の人種論にも疑問が残った。要するに、立論したゴビノオに直接対抗しなかったのは、単に反対することが目的ではなかったからである。そこには、きっとなんらか客観的理由があったはずであるが、鷗外自身の内心の葛藤にも関わっていたと考えられる。これについては、後述し検討することとする。

次に、「黄禍論梗概」の結論部分で、鷗外は日本民族が必ずしも支那人に劣っているわけではないという基本的姿勢をとっている。それを示唆する一方、日本に対する敵意が表れている〈人種論〉と〈黄禍論〉言説を客観的に分析することによって、講演会に出席した聞き手にそれらの誤謬を弁明し、本国への自信を取り戻すことを呼びかけていると思われる。また、日本を〈黄禍〉として汚名化しようとした〈黄禍論〉は、西洋人の臆病な内面による、一方的な謬論に過ぎないとしている。本来の鷗外であれば日本に対して偏見を持つヨーロッパ諸国に対し、さらに鋭くそれらの論点を問い詰めるはずであるが、なんらかの理由で彼がそれを引き止めたのは、興味深いものである。

以上の視点から見たように、一見鷗外の講演は〈人種論〉〈黄禍論〉を紹介することととどめたに見えるが、実は鷗外自身の西洋観を深く反映している。

三　明治期における〈人種論〉と〈黄禍論〉

前節の、鷗外の「人種哲学梗概」と「黄禍論梗概」についての講演内容の概要を踏まえ、本節では、これらの〈人種論〉言説と〈黄禍論〉言説について当時日本社会の反応を探究する。では、これらの日本を対象にした差別的な言説に対して、当時日本社会はどのように反応したのだろうか。

政界の〈黄禍論〉認識は明治三十六年に明確に定義づけがされたが、それ以前にも様々な視点から〈人種論〉と〈黄禍論〉に関する研究は既にされていた。この節では、明治期の社会はどのように〈人種〉問題をとらえていたか、そして、どのようにこの〈人種論〉と〈黄禍論〉を結びつけたか、という問題に焦点を当てていく。ここで留意すべきことは、日本人種が〈黄禍論〉の対象にされた支那人と同種の黄色人種であるかどうかという議論において、意見が両極化していた当時の背景である。

ここでこの背景を確認するために、日清戦争後の二つの相反する〈人種論〉言説を挙げる。まず〈人種論〉がいつから日本に入ったかという時期の問題であるが、その答えは前述のとおりはっきり

していない。日本人種の起源に関する明治期の研究は少なくない。その中でも、高山樗牛（1871・2・28（明治四年一月十日）・1902・12・24）は見過ごせない人物である。高山樗牛はアルフレッド・ウェーバー（Alfred Weber）やマクス・ミュラー（Max Müller）などを読み、アリアン人種と「チュラニアン人種」の文明や宗教を対比するという考え方を抱いていたことは、「島国的哲学思想」（『哲学雑誌』明治二十八年十一月）、「東西思想の比較一般」（『哲学雑誌』明治二十九年二月）から読み取ることができる。この「チュラニアン人種」（Thuranian、アジアの民族を指す総称）とは、元来ウラル・アルタイ系語族をいう名称であるが、樗牛の用法では、一般的にアリアン〈西洋〉に対するアジア人の総称の意味で用いられている。そしてこれに基づくと、日本人も支那人も「チュラニアン人種」なのである。樗牛が人種論へ関心を寄せるようになるまでの経過は明らかにされていないが、明治二十八、二十九年当初は学術的な関心に過ぎなかったと見られる。その後、日本における軍国主義の昂揚などといった時代背景のもとで、日清戦争後の三国干渉によってさらなる衝撃をうけたことで、急速に「人種競争」「人種戦争」の観点を取るに至ったと推測されている。明治三十年以降の「歴史と人種」（明治三十年六月）、「人種競争として見たる極東問題」（明治三十一年一月）、「異人種同盟」（明治三十一年三月）にも明らかなように、西欧とアジアの衝突を人種論によってとらえようとする姿勢が目立ち始める。

日本人種について、高山樗牛は「東洋の文明」（『世界文明史』、明治三十一年一月（自序））の中で、支那と日本を含む〈ツラン人種〉（『チュラニアン人種』と同様）が恐らくアジアにおける最も古い歴史的民族だろうと指摘し、〈アーリヤ人種〉とは異なる人種であると説いた。そして、樗牛は支那帝国の人々を最古の〈ツラン人種〉として、支那の文化・中心思想・文学・美術について、例を挙げながら詳細に紹介した。これに対し、日本人種が〈ツラン人種〉に属していることを表す点については少しも言及していないのである。さらに「人種競争として見たる極東問題」では、日本は支那に対してどのような立場を取るべきかについて、次の叙述が見られる[注4]。

〈嗚呼、日清戦争なるもの、何が為に起りしや。朝鮮の独立を扶翼し、東洋の平和を維持せむが為に作されたりと云ふに非ずや。朝鮮の独立、東洋の平和、是を以て名とするの戦は、天下の義戦なり。（中略）然れども、吾人は是の義戦を闘はむが為に支那帝国を再び起つ能はざるべく打撃したるに非ずや、吾人は実に悲しむなり。支那は吾人と同人種に属する唯一の帝国にあらずや。ツラン人種の国家は、極東以外に於て全くアールヤ人種の為に勦滅せられたり。吾人の日本と支那帝国とは、世界に於ける最後のツラン人種の国家として、相抱擁し、相提撕して其の運命を共にすべきことを誓ふべき非ずや。支那は吾人唯一の同胞なり。（中略）嗚呼、支那を半死せしめたる吾人は、自ら其の一手を断ちたるものには非らざる乎。思うて茲に至れば、吾人の誇とする所の日清戦争は、畢竟極東の奇禍、ツラン人種の一大不幸に非ずや。〉

ここに、日本人と支那人が同じ人種であることを強調し、日本と支那が互いに協力すべきであるという樗牛の立場が明確にあらわれている。日清戦争の勃発について、樗牛は日本の攻撃の正当性を主張しつつも、日本と支那は〈極東〉に残存する同人種の〈ツラン人種〉でありながら、日清戦争において殺し合いをせねばならぬ現状に対する彼の悲愴感を読み取ることができる。ただし、支那帝国と協力するしかないという樗牛の思いを強く感じると同時に、この彼の唱えた〈日本－支那〉関係において日本がとるべき姿勢は、それ以降の〈黄禍論〉の対象とされることと切り離せない接点でもある

と考えられる。また、樗牛はここで〈黄禍〉という言葉を使っておらず、その対象が誰であろうかを言明していない。彼が人種競争問題を今後の極東問題の核としていることから見れば、恐らくこの時点（明治三十、三十一年）では〈人種競争〉に重点が置かれ、〈黄禍〉言説はまだ芽生えたばかりであったと推測できる。

つぎに、樗牛の日本支那同種論の主張に対し、鷗外が「人種哲学梗概」で触れた田口卯吉の説に注目する。田口卯吉（安政二（1855）年四月二十九日～明治三十八（1905）年四月十三日）は、鼎軒という号を持ち、日本における自由主義的経済学の導入者として福沢諭吉、天野為之と共に並び称せられた三人のうちの一人である。また『日本開化小史』（明治十年）を著し、日本の近代的歴史学の先駆者として知られている。田口は早年から経済学と英語を修め、自由貿易日本経済論の研究に力を注いだ。彼の『自由交易日本経済論』や『日本経済論』はその成果として挙げられるが、注目すべきことは彼が創刊した『東京経済雑誌』である。イギリスの『エコノミスト』誌を手本として創刊されたこの『東京経済雑誌』は、田口の理想と意見を陳述する場であり、明治期の経済社会発展の指針となった。さらに、文明史研究の分野においては日本・支那開化に関する史学研究と、「日本人種論」や『破黄禍論』のような古代史の研究が列挙できる。その中でも特に〈人種〉研究については、田口は早くも明治二十八（1895）年に「日本人種論」（明治二十八年四月、『楽天録』再録）を『東京経済雑誌』（七七三号、五九一～六頁）に発表し、語法、容貌骨格や智力などの観点から研究した上で、日本人種が支那人種と同じ黄色人種であるという説に異議を唱えた。さらに、明治三十七年の四月から五月にかけて週刊誌『東京経済雑誌』（一二三〇～一二三六号）に『破黄禍論』に関する学説を続々と掲載し、言語学の視点を含め、日本人種をÂRIA人種と同種とし、優等人種として扱われるべきだと力説した。同年六月、『破黄禍論』は経済雑誌社から出版され、〈日本人種≠黄色人種〉という持論を広く世に問うている。彼の真意は、〈黄禍論の根拠に横はれる誤謬を明らかにし、欧洲人一部の迷夢を覚醒するを得ば幸なり〉という記述からも明らかである。同書において、田口は日本社会において高い地位を占める人々は〈決して黄人にあらざるなり〉とし、いわゆる〈天孫人種〉の血液が流れる優秀人種であると説いたのである。かくして、田口は日本人種が黄色人種であることを根本的に否定した。さらに彼は〈日本人種の本体たる天孫人種は一種の優等人種たることを疑はざる〉とし、〈其の言語文法より推断すれば、サンスクリット、ペルシア等と同人種にして、言語学者が称してアリアン語族と云へるものに属する〉と明言した。彼は〈天孫人種（日本人種）は白色なり〉という視点を主張し、言語的特徴を論拠として〈日本人種はアリアン語族に属するものなり〉ということを繰り返し強調した。以上述べた彼の〈人種論〉を踏まえ、田口は日本人が〈黄禍〉として非難されたことについて、それは全く事実無根の流説であると指摘したのである。田口の説では、日本人は支那人とは本質的に異なるという主張に力点が置かれている。そこにはやはり日清戦争の影が反映していることは否めない。その後の人種論を含めて、田口の日本人種起源論は、偏狭な民族的優越感の色を帯びたものといえるのである。

このような独善的な日本人種論に対し、勿論異論の声があがった。例えば、大隈重信は明治三十七年十月二十三日に早稲田大学清韓協会における演説で、〈ある人は日本人はアリアン種族だという。アリアンはさほど有難いものか、吾々は疑う。何というても我々の血はアリアンとは違う。我々の血の中に多少アリアンの血も交っているかもしれぬが、それがために日本民族がアリアン人種だというのは少し乱暴な断定である〉と非難している。また、この田口の説に対する鷗外の反応はどうかというと、鷗外は〈田口卯吉君は、確かに日本人種がÂRIA人種だと書いて居られたやうに記憶しますが、

私は分かりませぬ〉と、直接的ではないが、田口論に賛成しない立場を表明している。次に〈兎に角私が思ひますには、初め地球中心的（GEOCENTRIQUE）であつた天体論が仆れて、次いで人類中心的（ANTHROPOCENTRIQUE）であつた創世記が潰れたやうに、ÂRIA 人種中心的（ÂRIOCENTRIQUE）の人種論も、まだ出来立ての中に、早くも撼き出しはしますまいかと思ひ外。どれもどれも我田に水を引いた、身勝手の思想に本づいて居ますから〉と、婉曲的な表現で反論した。鷗外は露骨に田口に反論せず、ÂRIA 人種中心的な人種論の展開に対して、他の人類史の諸説のように我田引水の議論に過ぎないと指摘し、答えを保留するような態度をとっている。これまで日本支那異種論を貫いてきた田口は、人種上明らかな差異があるからこそ、日本人種を〈黄禍〉との関連から切り離そうとしたのである。しかし、その基本的姿勢が疑われたため、田口の『破黄禍論』はその発表後も酷評されたことは言うまでもない。「黄禍論梗概」において、鷗外自身は日本人と支那人は同種である黄色人種であるかという当初の問題についてはっきりとは自分の立場を表明していない。当時世論の流れに従えば、支那と日本が〈黄禍論〉の対象に含まれることを受け入れる鷗外の基本的姿勢は読み取れる。換言すれば、鷗外は日本人種が黄色人種であることを黙認し、田口説に反対しているといえるのである。ただし、田口に直接的に反論をしなかった理由については、ここでは言及せず、後述することとする。

田口が提唱した日本民族の起源がアリアン人種と同起源であるという説は、大正期、昭和期に入り、多様な方向に展開していった。例えば、木村鷹太郎、小谷部全一郎らは、日本民族の起源を西欧系民族（日本の遠祖はイスラエル民族であるなど）として立証するために、それぞれ多くの著作を世に出した。彼の人種論の捉え方は大きな批判を浴びながら、田口は確実に日本の学術界に彼の足跡を残したとも言える。しかし、紙幅の都合上、ここでは簡単に紹介することだけにとどめたい。

四　〈黄禍論〉の展開及び鷗外の立場

前節で述べたとおり、樗牛は、日本人種と支那人種を同一人種とし、同生共死である隣国同士という基本的姿勢をとり、日清戦争の開戦を〈極東の奇禍〉としている。一方で、田口は言語の観点から人種の起源にさかのぼり、日本人種が支那人種と同じ黄色人種でなく、優秀な〈アリヤン人種〉であると唱えた。また前節の補足になるが、田口はむしろロシア人こそが〈黄禍〉ではないかとさえ主張した。公に自論を主張した樗牛と田口に対し、鷗外がそれぞれの論に直接批判や意見を加えることはなかった。しかし鷗外は無関心だったのではなく、焦点をぼかす意図があったと考えられる。そこで、本節では、鷗外の〈人種論〉への関心を辿りながら、〈黄禍論〉の展開及び直接に批判を示さない鷗外の立場を検討していく。

鷗外は自ら「黄禍論梗概」で、〈白皙人種が黄色人種に対して、どういふ想像を画がいて居るか、どういふ感情を抱いて居るかと云ふことは、私の断えず研究していることでありまして、私は十年前当りから、種々の資料を蒐集致して居ります〉と述べており、彼が早くから〈人種〉問題に深く関心を抱いていたことがうかがえる。日清戦争前から既に〈人種〉に関する情報を収集し始めていた鷗外であるが、明治二十三年九月に人種論に関する記事である「報知新聞の人種相忌の説」を発表しただけで、それ以来、彼の〈人種〉に関する言論や著作などは、ほとんど見られない。数少ない彼の〈人種論〉に関する記録・作品としては、すでに取り上げた「人種哲学梗概」と「黄禍論梗概」の講演に加え、「うた日記」における「黄禍」（明治三十七（1904）年八月十七日於張家園子）と題する詩があげられる。これはおそらく新聞等で〈白人ばらのえせ批判〉を目の当たりにし、即興で作った作であろう。一種

の思想詩とでも称すべき、辛辣で激しい批判を含んだ歴史的証言である。

「黄禍」[注5]

勝たば黄禍　　負けば野蛮
白人ばらの　　えせ批判
褒むとも誰か　よろこばん
謗るを誰か　　うれふべき

黄禍げにも　　野蛮げにも
すさまじきかな　よべの夢
黄なる流の　　滔滔と
みなぎりわたる　欧羅巴

見よや黄禍　　見よや野蛮
誰かささへん　そのあらび
驕奢に酔へる　白人は
蝗襲ふ　　たなつもの

黄禍あらず　　野蛮あらず
白人ばらよ　　なおそれそ
砲火とだえし　霖雨の
野営のゆめは　あとぞなき

＊　＊　＊
黄なる奴　繭糸となれ　われ富まん　いなまば汝　きなるわざはい
黄なれども　おなじ契の　神の子を　しへたぐる汝　しろきわざはい

この「黄禍」は、黄色人種が勝てば〈黄禍〉と騒ぎ立て、負ければ野蛮と誹る白人中心主義への憤懣をうたったものである。鷗外はヨーロッパに沸騰する黄の流れのイメージを夢に見る。また、〈黄なれども　おなじ契の　神の子を　しへたぐる汝　しろきわざはい〉が、その主題を要約している。これは社会的な批判というより、鷗外のドイツ留学以来の被差別感が、〈野営のゆめ〉という〈黄〉のイメージとして噴出してきたものと思われる。そして、「人種哲学梗概」と「黄禍論梗概」では抑えられた西洋への不満、感奮する思いは、この「黄禍」詩で完全に解き放たれた。さらに言及すれば、この時期にこの詩「黄禍」が書かれたことにも大きな意味がある。この詩の根底には、鷗外の危機感があった。〈黄禍論〉は日本の日清戦争勝利を受けて、ドイツ皇帝ウィルヘルム二世によって唱えられたものであるが、これに対し彼は前年十一月二十八日、早稲田大学の課外講義で〈黄禍論〉に反論する〈白禍論〉を展開したのである。そして、この「黄禍」詩が書かれる三ヶ月前に、その講演をも

とに「黄禍論梗概」の単行本が出されている。その広告文で、人道に逆らい、国際法を破っているのは、むしろ白色人種であり、〈予は世界に白禍あるを知る。而して黄禍あるを知らず〉と述べている。

実は、この「黄禍」詩の裏には、鷗外の複雑な心の葛藤がある。一見すると、この「黄禍」詩は時の世論に迎合し西洋を批判する立場をとったものであると思われるが、実は鷗外のドイツ留学時期から持ち続けてきた西洋への強い憧れをも持ち合わせたものである。この詩には鷗外の西洋に対する愛憎二つの情が並存しているのである。その愛にあたるのは鷗外の文明開化の国への崇拝の情であり、憎は東亜侵略の〈白禍〉の国への嫌悪の情である。このような相反する感情はドイツ留学時期に芽生え始めたと考えられる。官費留学の経験を持つ鷗外は、日本ではエリート優遇される地位を持っている。しかし、異国であるドイツ、つまり白色人種を中心とした世界に足を踏み入れたことで、彼は疎外感を覚えるようになる。それは、彼が〈黄なる面〉の持ち主であり、彼ら白色人種とは異なる人種であることに起因する。たとえエリートであっても、彼ら白色人種から見れば下位の、そして異なった人種として扱われるのである。このような不平等感覚は〈黄禍論〉で呼び覚まされ、このドイツ留学時期に経験した複雑な心境に再び火をつけた形となったのではないか。この「黄禍」詩の創作によって、鷗外はそれまで鬱積させていた不満を一気に発散したのである。

以上のように、西洋に対する愛憎両方の感情を持っていたからこそ、「人種哲学梗概」と「黄禍論梗概」において、鷗外は西洋の黄色人種への不条理な批判に対して、直接的に反論しなかったと考えられる。また、この愛憎入り交じった二つの情が纏った複雑な思いは、鷗外自身が西洋世界の光と影の両方を体験し、理解していたことに因る。彼のこのような西洋諸国への態度は、当時の世論のように過激な見方、一方的なものと一線を画したものであり、より中立的であると言えよう。

五　日露戦争にあたっての鷗外の関心

鷗外の〈黄禍論〉に関する講演で、ヨーロッパ列強を強く批判しなかった理由が彼自身の葛藤にあったことは、前節で述べてきた通りである。ここではさらに、当時の鷗外自身にまつわる出来事から〈人種論〉と〈黄禍論〉への批判の立場を考えていく。

明治二十年代から〈人種論〉に関する資料を収集し続けていたと明言していたほどの鷗外であるから、〈人種〉の問題は決して無視できるものではなかったことに違いない。ところが、「人種哲学梗概」を除いては、それに関する発表は見られない。敢えて挙げるとすれば、『衛生新篇』の「種族」という一章であるが、この一篇はどちらかというと生物学的視点からの考察と言ってよい。この「種族」においては、主として繁殖と遺伝、及び淘汰と進化を説いているのである。ここで言及している〈種族〉〈進化〉などの言葉は、主に身体的機能等のことを指しており、前述した樗牛論・田口論に触れた際の意味とは異なっている。軍医として衛生学の研究を主としていた鷗外にとって、〈人種〉についての研究をする可能性が皆無であったとは言えないが、〈人種〉の進化や分類といった本質的研究にまでは手が届いていないようである。

このように、「人種哲学梗概」だけでは異を唱える田口に論理的に反論することが難しいことは言うまでもないであろう。これはそもそも、専門外の領域に関する議論においては発言を慎重にするという鷗外の基本的姿勢の表れであろう。〈人種〉についても例に漏れず、鷗外はそれに精通した田口に対して、批判する立場にないことを自ら悟っているようである。このようにして見ると、これは全て理性に基づく鷗外の面影と合致しているのである。鷗外は「鼎軒先生」において、田口について次

のように語っている[注6]。

鷗外は実際に田口に会ったことが一度もなく、上田敏の口から田口卯吉は上田敏の親族であることを偶然に聞き知ったのである。それは、田口によって出された〈アアリア人種に日本人も属するといふことを論じた小冊子を出された頃〉であった（おそらく『破黄禍論』出版後まもなくのことであろう）。ある日鷗外は、日本人がアアリア人種だと論断した田口の言語学上の理由について、〈間口ばかり広くて手薄である、学者はあんな軽率な論断をしては困るぢぁないか〉という批判的な言葉で、そのときに来訪した上田敏に聞いた。上田は、〈愛敬のある畳なり合った歯を見せて、意味ありげに笑った、「田口は僕の親類だ」〉と答えた。その時に始めて田口上田両家の関係を知った鷗外は、多少なりとも田口に親しみを感じたようである。後に田口の息子文太が陸軍の薬剤官になる、つまり鷗外の部下になることを聴き知って、鷗外は〈間接に鼎軒先生に接近するやうな心持がして来た〉と述べるのである。このように、たとえ田口論に賛成しなくても、田口が友人上田敏と親族関係を持っていることを考慮した鷗外は、やはり「黄禍論梗概」中に田口論へ直接的批判を避けたのであろう。

次に、鷗外が〈人種論〉〈黄禍論〉研究に熱中していなかった原因としては、当時〈人種論〉と〈黄禍論〉以外にも力を注ぐ対象があったという、鷗外の文学者としての活動が挙げられる。この頃に該当する彼の活動としては、西洋文学の翻訳事業がある。明治二十五年十一月から始めたアンデルセンの『即興詩人』の翻訳は、日清戦争（明治二十七～二十八年）への従軍をはさみ、明治三十四年一月十五日にようやく完成した。九年間、計三十八回にわたって雑誌『しがらみ草紙』と『目不酔草』に分載された『即興詩人』の翻訳は、全巻訳の完了翌年、明治三十五年九月一日に初版が出版された。この初版刊行に際し、鷗外は用語の書き換えや段落の削除といった細かい箇所まで修正を加えた。『即興詩人』がドイツ留学時期から愛読してきた文学作品であるからこそ、この修正に手間をかけたのであろうが、相当な労力を費やしたといわれている。その他の美学・芸術に関する作品の翻訳も日清戦争終了後からこの時期に集中し、『印度審美論』（『めさまし草』、明治二十九年四月二十五日）、『審美新説』（明治三十一年から『めさまし草』に分載され、明治三十三年二月二十三日春陽堂に単行本が出された）、『洋画手引草』（大村西崖・久米桂一郎・岩村透　共撰、画報社、明治三十一年十二月四日）、『審美綱領』（春陽堂、明治三十二年六月二十九日）、『審美極致論』（明治三十四年から『めさまし草』に分載され、明治三十五年二月二十四日春陽堂に単行本として刊行された）、『審美仮象論』（明治三十四年十二月から『めさまし草』に二回連載された後に廃刊になったため、『芸文』に掲載されるようになったが、未完のままで終わった）の美学理論シリーズは、この時期の翻訳作品の代表と言える。上記に挙げたように、小説、詩歌のみにとどまらず、美学に関する著作の翻訳にも着手していたことをみると、翻訳の多角的な活動に対する鷗外の熱心な姿が浮き彫りになる。また、鷗外は歌舞伎についての評論と評語集『万年艸』の執筆もしていた。要するに、鷗外の文芸への関心は著しく大きかったと考えられる。

これまで見てきたように、小倉時代から日露戦争の勃発までの鷗外は、〈人種〉〈黄禍〉問題にとどまらず、文芸と西洋作品の翻訳にも力を入れていたということがわかる。そしてその作品の規模から考えると、人種論者としてよりむしろ文学者としてドイツ文学を日本に紹介することに力点をおいていたということが言えるのである。

まとめ

本稿では、日露戦争の勃発直前に発表された「人種哲学梗概」と「黄禍論梗概」における鷗外の立

場を検討しながら、この二つの講演で彼が同時代の言説に直接的な批判を避けた原因について考察してきた。本論では以下のようなことを原因として挙げた。

まず、鷗外自身の葛藤による心理的な要素に注目した。彼の、ドイツを始めとする西洋への愛憎交じり合った感情がそれである。彼の愛憎の感情は次のように要約される。彼の西洋を愛する姿勢は異国への憧憬、進んだ文明への崇拝の念を柱としている。このような西洋を思慕する鷗外の心理は彼の初期作品からも読み取れるものである。その一方にある憎は東亜侵略をする白色人種の差別的な思想と独善的な態度、つまり〈白禍〉という思想に基づくものである。この相反する、時に矛盾する思いを内に秘めていたからこそ、彼は当時の国内の世論に従わず、西洋の〈黄禍〉議論についてあからさまな批判を口に出さなかったのである。しかし、例外として後の日露戦争中に発表された「黄禍」詩ではそれまで秘めてきた内心の葛藤と西洋への憤懣を露わにしている。そしてこれが鷗外の〈黄禍論〉批評の最後の作品となっている。

次いで、彼の人間関係からもう一つの原因が読み取れる。当時の反〈人種論〉・〈黄禍論〉言論に関しても鷗外がそれらに反論するはっきりとした態度はみられないが、これはこの反〈人種論〉・〈黄禍論〉の中心的人物との関わりに答えを見出すことが出来る。その人物とは彼が〈人種哲学梗概〉で言及した田口卯吉である。日本人種が ÂRIA 人種だと断言する田口について、鷗外はただ田口論が〈我田に水を引いた、身勝手の思想に〉すぎないと評するに留まっている。鷗外が直接的に田口を批判しなかった原因として二つのことが挙げられる。一つは、鷗外自身が人種に関する研究に、田口のように精通していなかったということである。専門家である田口に対し、鷗外は多少引け目を感じていたのであろう。もう一つは、田口が鷗外の友人上田敏の親族であったという個人的交友関係の問題である。彼が田口に反論することは田口を尊敬する上田敏との関係に何らかの影響を及ぼすことは避けられない。彼との関係を考慮し、優先させた結果が鷗外自身の言論のあり方に顕著に現れているといえる。

また、「人種哲学梗概」と「黄禍論梗概」の結論に、鷗外の個人的な見解はほとんど見受けられない。これは彼がこの講演に際して、入念な準備をしてなかったことに起因している。その準備不足の原因としては、この時期の鷗外が文芸活動に力を入れていたことがある。長篇翻訳小説『即興詩人』の初版の出版にあたっての校正、美学に関する一連の西洋文学作品の翻訳活動に重点を置いていたのである。このように、〈人種論〉〈黄禍論〉に対して関心を持っていたことに違いはないが、多忙な文芸活動がこの頃の彼の制作の中心であり、その他のことに目を配る余裕がなかったのである。

鷗外が「人種哲学梗概」と「黄禍論梗概」の講演において、直接的批判を回避した原因は以上に見てきた通りである。では、なぜ鷗外はこれらの講演発表に踏み切ったのか。「黄禍論梗概」の「例言」に述べた〈黄禍論は諸家其立脚地を同じうせず。此書は只だ衆論中の一たるにすぎず。然れども読者略ぼ此に依りて黄禍論の何物たるを窺ふことを得べし〉のように、鷗外にとって〈黄禍論〉批判が主たる目的ではなかったのである。彼の意図はこの〈黄禍論〉説を紹介することにあった。ただしこの鷗外の演説からは、明治期に大量的に輸入された〈黄禍〉言説などの西洋思想に対し、一方的に受け入れるのではなく、まずは自文化を振り返って省察する必要がある、という理念が読み取れる。ここで、話し手である鷗外も自身の西洋に対する矛盾した気持ちの葛藤を乗り越え、世界における日本の位置をしっかりと認識する必要性があると改めて感じたに違いない。彼はこのような認識を少なからずとも持っていたからこそ、過剰な批判や自国の卑下を避けたである。性格的にも意思が強かったと

いわれている森鷗外は、対西洋文明における日本のあるべき姿をしっかりと持ち続け、この黄禍論を通して自らの価値を再認識したといえる。

注

1. 改訂註釈『樗牛全集』共五巻、日本図書センター、1980・3・15。本論文における高山樗牛に関する引用や初出情報は、全て『樗牛全集』に準ずる。
2. 〈黄禍論〉について、平凡社『大百科事典』は次のように定義している。《黄禍論（Yellow Peril）とは、十九世紀末に、黄色人種がやがて世界に災禍をもたらすであろうというヨーロッパで起こった説で、ドイツ皇帝ウイルヘルム二世が、一八九五年の下関条約に際し、ロシアが日本の遼東半島領有に反対して共同干渉を提案したのに賛成して激励の手紙を書き、画家クナックフス（H. Knackfuss）に〈黄禍の図〉を描かせてロシア皇帝ニコライ二世に送ってからヨーロッパに広まった。それはちょうど日清戦争後のことで、フランスの外交家ゴビノー（J. A. Gobineau）の『人種不平等論』やドイツの哲学者チェンバレン（H. S. Chamberlain）の『十九世紀の基礎』が出版され、影響を与えたといわれているが、日本や中国では三国干渉の結果として「黄禍論」にたいして「白禍」が叫ばれるようにもなり、黄禍論を詳述した小寺謙吉『大亜細亜主義論』（1916）のような著作も出版された。また黄禍論は、日露戦争後に日本と米・英との対立が高まる中で、日本と米英との未来戦物語に大きな影響を与え、千葉秋甫・田中浪花『黄禍白禍未来之大戦』（1907）といったものまで現われた。そしてやがて日中戦争が始まると、黄禍論は東亜共同体論に、さらに太平洋戦争では大東亜共栄圏として、国民を戦争に動員する思想的根拠ともなったと考えられる。》
3. 山室信一「第四章　二〇世紀最初の世界戦争　3　人種戦争とメディア戦争」（『日露戦争の世紀』岩波新書（新赤版）958、岩波書店、2005・7・20）《日本政府が開戦時の方針を決定した一九〇三年の閣議決定では、〈恐黄熱の再燃を防ぐこと〉が特に項目として挙げられ、〈恐黄熱〉が日本の戦争遂行に大きい障害となることを懸念していました。日本が清国に中立宣言させることを勧めたのは、日本と清国が連合したとみなされれば、黄色人種と白色人種との戦争という印象が強まり、諸国の干渉を招くという懸念があったことも理由のひとつでした。この〈恐黄熱〉について閣議決定では〈白人種が黄人種の跋扈〔のさばり、はびこること〕を恐れること〉と定義していますが、これが黄禍論と呼ばれているものであり、黄色人種が勃興して、白色人種に反抗し禍害を加えるという論議でした。》
4. 『樗牛全集　第五巻　世界文明史・近世美学』、博文館　1930・9・28。
5. 『鷗外全集』第十九巻に引用したもの。
6. 『東京経済雑誌』第六十三巻第千五百九十一号〈鼎軒田口博士七回忌記念号〉、明治四十四年四月二十二日

参考文献（論者五十音順）

・飯倉章「日露戦争中の黄禍論の喧伝に対する日本側の対応 The Japanese Response to the Cry of the Yellow Peril during the Russo-Japanese War」（『国際文化研究所紀要』第11号　城西大学国際部文化研究所　2006・3・20）

・川端俊英「『破戒』に先行する人種論（一）―森鷗外による問題提起―」（『同朋大学論叢』第80巻　1999・6・1）

・小松伸六「ミュンヘン物語5 "黄禍論" など―ナウマン，森鷗外，ピエール・ロチ―」（『文学界』第35巻第11号　文化公論社　1981・11）

・中村尚美「日本帝国と黄禍論」（『社会科学討究』第41巻第3号　通号121号　早稲田大学社会科学研究

所 1996・3・1）
・橋川文三『黄禍物語』（筑摩書房 1976・8・25）
・原田敬一『日清・日露戦争』（日本近現代史③ 岩波新書1044 岩波書店 2007・2・20）
・平川祐弘「非西洋の近代化と人種間問題－－森鷗外と黄禍論をめぐって」（『比較文化研究』通号7 東京大学教養学部比較文学比較文化研究室 1966）
・山室信一『日露戦争の世紀』（岩波新書958 岩波書店 2005・7・20）
・林正子「日清・日露戦争間のドイツ思想・文化論の意義—鷗外と樗牛・潮風の評論活動を視座として」（酒井敏・原国人編『森鷗外論集 歴史に聞く』 新典社 2000・5・11）

Tetsugaku Kogai and Kokaron Kogai: Mori Ogai' s Concerns towards the Yellow Peril in the 30' s Meiji Era

Liao Yu-Ching

Mori Ogai' s *Tetsugaku Kogai and Kokaron Kogai* discuss two serious concepts during the Meiji 30s (1897-1919): the Racial Philosophy Concept and the Yellow Peril Concept. These two concepts spread rapidly throughout the western world during the late 19th century and reached the East during the Sino-Japanese War (1894-1895) where they greatly influenced the outbreak of the Russo-Japanese War in 1904. Various views of Mori' s concepts, especially that of the Yellow Peril, developed within Japanese society heavily influenced by the Meiji government, while Mori maintained his own independent and contrary stance. Mori gave two speeches introducing the Yellow Peril concept but always showed an uncommitted and passive attitude when discussing the unfair censures of the western world. He gave no counterattacks to accusations made against China and Japan in the West and was therefore regarded as having an abnormal reaction to the criticism placed before him. The purpose of this paper is to discuss the different statements about the Yellow Peril developed during the Meiji 30s in Japanese society and to explore why Mori neither reacted to those critics nor showed strong criticism of Yellow Peril in his speeches.